（ 続紙 １ ）

| 京都大学 | 博士（地域研究） | 氏名 | 泉　直亮 |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | 土地を求めて移住した農牧民の社会・経済変容と地元住民との共存に関する研究<br>―タンザニア・ルクワ湖畔におけるスクマの事例― | | |

（論文内容の要旨）

タンザニアに居住する農牧民スクマは、従来はヴィクトリア湖に近い北部地域を本拠地としていたが、1970年代からその一部の人びとは、社会的・経済的にもっとも重要な財産であるウシの放牧地を求めて国内各地へと南下していった。本論文の目的は、タンザニア南西部のルクワ湖畔に移住したスクマの社会・経済の変容と地元住民との共存の実態をあきらかにすることである。

第１章では、本研究の背景と目的を示した。アフリカでは近年、農村内部における経済格差の拡大が指摘されているが、タンザニアも例外ではない。ウシを中心として多くの家畜を所有する農牧民は、農村の経済発展において重要視されている一方で、家畜をあまりもたない農民との格差が大きくなっている。彼らはまた、広大な放牧地を必要とするため、国家による自然保護・観光振興政策としばしば衝突する。本研究が対象とするスクマは、移住した先で大規模な牧畜・農耕をおこなっており、こうした現代的な問題を典型的に体現している人びとである。

第２章では、スクマ社会の概要、および調査地であるルクワ湖畔地域の概略を記述した。スクマが大規模な移住を開始するにいたった歴史的な経緯には、イギリス委任統治領政府が主導した農村開発と、独立後のタンザニア政府が実施した集住化政策が大きく影響していた。また、調査地のルクワ湖畔には、移住者であるスクマと先住者のワンダとが居住しているが、両者の社会を比較し、それぞれの特性を明らかにした。

第３章では、ルクワ湖畔におけるスクマの主要な生産活動である牧畜と農耕を記述し、量的な分析をおこなった。スクマの牧畜は、ときには一世帯あたりのウシの所有頭数が4000頭を超えることもある大規模なものであるが、その家畜管理がどのような技術的、社会的なメカニズムで可能になっているのかを明らかにした。同時にスクマは、コメやトウモロコシの大規模な農耕をおこなっているが、その生産と消費、販売の実態を解明した。従来のスクマは自給的な農耕をおこない、家畜を重要な貯蓄手段としてきたが、近年では農耕と牧畜をともに商業的に展開していること、また、それはタンザニアにおける市場経済化への流れとも深くかかわっていることを論じた。

第４章では、以上のようなスクマの大規模な生産活動の核となるのは、親族を中心に構成される個々の世帯であり、世帯の規模と生産の規模は比例していることを解明した。スクマの世帯主のなかには世帯サイズを意図的に縮小させるものがおり、そのような世帯が大規模な富豪世帯の形成を支えていた。大規模な世帯はまた、世帯主が既婚の息子を独立させずに長く世帯に留めることによって成立しているが、それは、世帯主と息子のあいだのさまざまな社会的交渉によって可能になっていた。

第５章では、スクマと地元住民のワンダとの経済的な関係を記述した。スクマは、牧畜に必要な労働力は世帯の男性親族を中心として工面しているが、農耕に必要な労働力の大部分は、ワンダの日雇い労働者に依存していた。逆に、ワンダ世帯のおよそ半数は、スクマに雇

われることで収入を得ていた。移住者であるスクマは人口のうえでは少数派であり、地理的・政治的には「周縁」に位置する。しかし経済的には、そのスクマが「中央」を占める多数派のワンダを雇用するという逆転現象が起こっていた。

第６章では、スクマのウシ牧畜が危機に直面している状況を記述し、彼らがその窮状にどのように対応しているのかをあきらかにした。従来はウシにつよく依存してきたスクマは、現在は経済活動を多様化し、市場の存在を前提とした商業的な農耕や牧畜をおこなっている。一部のスクマは、コメやウシの販売で得た利益を、ホテル経営や運送業などに投資しはじめている。スクマはまた、移住によって牧畜を拡大できるフロンティアが消失しつつあると認識しており、地元住民のワンダと友好的な関係を構築する努力をしている。

終章である第７章では、現代タンザニア農村におけるスクマの経済的な戦略と社会的な役割について総合的に考察した。大規模なウシ牧畜を維持・拡大することが困難な状況において、スクマは、ウシや農作物の商業的な生産によって得た利益を、農業以外の商売に投資し、また、土地を購入することで財産の多様化もはかっていた。同時に彼らは、政治的なマジョリティである地元住民のワンダとの共存をはかっている。具体的には、農耕のために多くのワンダを雇用して、ワンダに現金やセーフティネットを提供することで「富者」としての社会的な責務をはたし、同時に、農耕を拡大して市場で多くの利益を得ていた。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

一般的に、牧畜という生業がおこなわれているのは、つよく乾燥した辺境地であることが多く、それに従事する牧畜民・農牧民は、国家のなかで周縁的な地位におかれている。また、中央政府にとっては、牧畜活動にともなって高い移動性を維持している人びとの生活は把握・管理することがむずかしい。牧畜民や農牧民が家畜の放牧に利用する地域は、野生動物の棲息地域とかさなるため、政府が実施する自然保護政策や観光産業の振興政策と対立することもあれば、周辺の農耕民とのあいだで土地をめぐる争いがおきることもある。本博士論文は、長期にわたる現地調査にもとづいて、牧畜民や農牧民と、国家や周辺住民とのあいだの共存の方途がどのように構築できるのかという、地域研究の重要課題にとり組んだ意欲的な研究成果である。

本論文が研究対象とするスクマは、1970年代にタンザニア北西部から南方への移動を開始した人びとである。彼らは、タンザニア各地において大規模な牧畜に従事すると同時に、ウシをもちいた犂耕の技術によって広大な水田を開拓して、コメの商業的な生産もおこなっている。一方、彼らはタンザニア政府から「ウシを増やすばかりで販売せず、国家の経済に貢献しない」「国立公園や動物保護区でウシを放牧している」「周囲に住む農耕民の作物に食害をあたえ、暴力事件をひきおこす原因をつくっている」といったように、つよく批判されており、政府がスクマを暴力的に排除する事態もおこっている。このような状況は、マスメディアにも大きくとりあげられているが、スクマ社会の実態が詳細に調査されたことはなかった。本論文は、こうしたスクマの人びとの生業と、移住先における地元住民との相互関係の実態を詳細に記述・分析したものである。

本論文は、以下の３つの学術的貢献によって高く評価できる。第一には、スクマが従事する牧畜と農耕に関して、その生産と消費、販売の実態を、量的なデータにもとづいて詳細に解明したことである。調査地におけるスクマ世帯のウシ飼養頭数は平均836頭［N=11］であり、農業以外の経済活動をさかんにおこなっている世帯では、主としてオスウシを市場で積極的に販売している。また、主たる作物であるコメとトウモロコシについて、その平均作付面積はそれぞれ約69,000㎡と約29,000㎡、平均の余剰量はそれぞれ生産量の74.7％と55.6％、平均販売収入はそれぞれ約1,145万シリング（約69万円）と約415万シリング（約25万円）［いずれもN=11］）と、いずれも非常に大規模である。

本論文の第二の貢献は、こうした大規模な牧畜経営が、どのような組織によって可能になっているのかを解明したところにある。スクマ社会では、世帯の規模と農業生産の規模は比例している。そして、牧畜に必要な多くの労働力は、基本的には父系の拡大家族内で調達しており、既婚の息子を独立させずにおおきな同居集団を維持するための工夫がなされている。本論文は、ときには独立を志向する息子とそれを抑制する父親がさまざまな交渉をおこないつつ、世帯のサイズを拡大、または縮小する機序を詳細に記述している。

本論文の第三の貢献は、移住民であるスクマと地元住民であるワンダとの関係を、社会経済的な観点から明らかにしたことである。農耕民であるワンダは、人口が多く、政治的にもつよい立場にあるが、農耕や牧畜の規模は小さく、食糧が不足する年にはスクマに雇

用されることで得られる賃金におおきく依存している。一方、スクマはコメの生産に必要な労働力の大部分を、ワンダを雇用することでまかなっている。両民族のあいだには経済格差があり、スクマの家畜がワンダの農作物に被害をおよぼすなど、両者のあいだに争いがおこることもある。本論文は、人びとがこうした対立をどのように克服し、共存関係を構築しているのかを、経済的な相互依存関係という視点から解明しており、その功績は高く評価できる。

以上のように本論文は、これまでにあまり研究の蓄積がなかったタンザニアのスクマ社会を対象として、その農業生産の実態を緻密な量的資料にもとづいて解明するとともに、人びとが潜在する争いを回避し、共存を実現するためにおこなっている実践を明らかにした優秀な研究である。

よって本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年7月24日、論文の内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。